

史観第一五六冊

請願書で危惧されている、ハンザ商人が離反していく別の都市とは、アントウェルペンであろう。一六世紀前半以降、ハンザとアントウェルペンの結びつきが次第に強化されていった。一五四六年に、ハンザはアントウェルペンにおける居住と貿易に関する契約を結んだ。この契約に対しアムステルダム市参事会員は、「ハンザ商人が、彼らの商品を今後はアントウェルペンに運び、その結果ホラントに運ばなくなる」と不安視していた。一五六三年、商館建設に関し最終的な契約がハンザとアントウェルペンで結ばれた。これは請願書が提出される一年前にあたる。

ハンザとアントウェルペンの結束は、中心市場としてのアムステルダムの地位に深刻な打撃を与え得るであろうか。統計史料からは、一五六〇年を過ぎてからのオランダ船舶の圧倒的多数が読み取られ、ハンザの貿易活動が大きな影響力をもっていたように思われない。しかしその一方、先行する時代に目を向けてみると、一五三六年、一五四二〜四四年にはオランダ船舶数が急激な落ち込んでいることが注目される。オランダ船舶がバルト海地方に向か際に利用したエーアソン海峡の安全が、戦争により悪化したからである。この時期にオランダのバルト海貿易は著しく縮小したが、ハンザ船舶は一五四三年を除けば一定の水準を維持している。

一五六三年に、バルト海東方で北方七年戦争が勃発した。その際、デンマークはオランダ船舶に対しエーアソン海峡通過を制限し始め、一五六四年には海峡を完全封鎖した。まさにこの年、アムステルダ

一五〇

ム商人たちは請願書を提出し、ハンザ商人の確保を求めた。以上の状況を考えると、請願書でアムステルダム商人が、ハンザ商人の商業活動を重視した理由が明確になる。一つはハンザとアントウェルペンの結束の強化、もう一つはエーアソン海峡の不安定化である。以上から、ハンザ―オランダ関係史において、長年にわたる競争が一方の敗退と一方の勝利をもって一六世紀前半に決着するという直線的な図式のみでは両者の関係を十分に捉えることができないことが明らかとなった。一六世紀中葉においてもアムステルダムの商人たちは、バルト海におけるハンザの影響力を注視しつつ、協調関係を模索していたと言えるよう。

〈考古学部会〉

中央ユーラシア東部における初期の鉄器文化受容とその展開
—新疆ウイグル自治区の青銅器時代から初期鉄器時代を中心に—

田中 裕子

中央ユーラシアは、ヨーロッパや西アジアのユーラシア大陸西部地帯と東部中国との中間連結部に位置する。特に中国に隣接する新疆ウイグル自治区について、中西交流に視点を置いた研究が数多く行われており、その中の一つに鉄の問題がある。中国で鉄器が発達するのは戦国時代以降であり、鑄造鉄器を脱炭して鋼を製作し、刃

部を形成する技法が主流であった。一方、新疆ウイグル自治区では、前三世紀の遺跡からの初出以降、西周、春秋に並行する時代の遺跡からの鉄器の出土が見られる。新疆ウイグル自治区出土の鉄は小型の利器が多く、中国内地とは技術の系統が異なるとされる。中国の鉄器製作が自発技術なのか、導入技術なのか、という問題とも関連し新疆ウイグル自治区出土の鉄器は八〇年代後半より注目されてきていた。しかし、年代的な位置づけや、出土鉄器の数量、遺存上の問題などがあり、これまで全体的な傾向として触れられることはあっても、新疆より出土する鉄単独に着目して分析を行った研究はすくないのが現状である。

近年、イリ地区やハミ地域において発掘が相次ぎ、初期の鉄器の出土事例が蓄積されてきた。また、青銅器が主体ではあるが、自然科学の分野からの材料分析も行われ、若干の鉄製遺物に対して、技術的な検討も試みが行われはじめた。注目されながらも、詳細の不明確な点の多い出土鉄器について出土器種、出土量の変遷、その所属年代等の整理を行い、研究の基礎を固めることが本論の目的である。

これまでの研究において、新疆ウイグル自治区から出土する鉄器について、以下のことが明らかになっている。前三世紀に相当するイエンプラク墓地一期の出土品を最古とする。その後も継続して各地から出土が見られる。鍛造製作による小型利器が主体である。製造遺構も、年代は絞り込めていないものの、見つかった。問

題点としては、大枠としての初出や全体像はつかめているが、どの器種が中心であるか、出土量の変化に面期はあるか、青銅器との関係はどうなっているのか、中原との関係、近隣の周辺地域との関連など具体的な詳細は不明瞭な部分が多い。

よって、新疆ウイグル自治区の初期鉄器時代に遺跡より出土する鉄器に対して、時間軸上での鉄製品の数量、器種の変化の比較検討を主な研究方法とし、分析を進める。鉄器それ自体から形態上の編年を考察するのは、遺存状態等の問題もあり難しい。同一遺構内において共伴する土器を基準に時間軸を設定し、鉄器の所属時代を検討する。新疆ウイグル自治区は、大きく北部の草原地帯と南部の砂漠地帯に区分でき、地形的な特徴から主に一地区に分けることができる。土器の器種構成や文様などに基づき、この中で大きく六つの文化圏をまとめることができる。1. ジュンガル盆地西北縁、2. バリコン・ハミ地区、3. トルファン盆地、4. 天山南麓、5. パミール高原、6. タクラマカン砂漠南・北縁で以上、それぞれの地域ごとに土器による年代決定を行う。土器は器種ごとの組成や形態の変化を中心に、韓建業（二〇〇五）等を参考にして、編年図を作成した。それを基準として、青銅器と鉄器のそれぞれの時期を位置づけ、出土量や出土器種の比較を行った。

まず、全体を通して明らかになったことを述べる。青銅器時代から初期鉄器時代の新疆ウイグル自治区から出土している鉄器は、刀子、錐、鏃、剣、指環、鏡などである。現在、形態の不明瞭なもの

も含めると三四遺跡二二四点の出土を数えることができた。最も出土量が多いのは刀子であり、新疆全体で五四点、全出土鉄器の四分の一に相当する。

次に個別地域について、明らかとなった状況を述べる。新疆東部のバリコン・ハミ地区では、もっとも早く鉄器が出土する。鉄製の刀子や剣先の他、指環が出土し、鉄が装飾品として利用されていた。しかし、中国の西周・春秋時代に平行する時期の遺跡では、青銅製の利器や装飾品が使用され、鉄器の利用に空白が生じている。その後、戦国時代晩期に平行する時期より、刀子や錐などの利器が鉄になる。

ジュンガル盆地西北縁は、アルタイ地区や塔城地区、イリ河流域および天山北麓の草原地帯を指す。この地域では、春秋並行期より鉄製刀子が恒常的に出土する。墓から羊の骨と鉄刀子というセット関係で出土する。時折、青銅製の刀子も出土するが、鉄製刀子が中心である。他に鉄器では錐や剣などの出土がある。同時期の青銅製品は簪などの装身具が中心となる。

トルファン盆地は、ヤンハイ墓地やスバシ墓地を中心とする。初期は青銅製の利器の利用が中心である。戦国時代並行期には鉄器へと移行し、刀子や錐、針などは全て鉄製となる。青銅器は耳環や鏡などが主体であり、利器の出土は確認できない。

天山南麓は、チャウフ墓地などを中心とする地域で、一部タクラマカン砂漠の北縁にあたるチュンバク遺跡なども含む。全体的に鉄

器の出土はあるが、青銅製利器の利用が非常に目立つ。全期間を通して青銅製刀子が三三二点出土するのに対し、鉄製刀子は七点ほどである。戦国から漢代に並行する時期に鉄製利器や鉄製武器の出土が確認できるが、他地域と比べ、青銅器の利用が活発なことが明らかとなった。

以上をまとめると次のようになる。最初期では、鉄製装飾品が多い。すぐに鉄製の刀子、錐など小型利器が主流をしめるようになる。前一〇〇〇年紀全体を通じて、青銅製の利器が減少し、鉄製に変わっていくが、ジュンガル盆地西北縁がもっとも早く春秋並行期であり、天山南麓は遅れて漢代並行期よりとなる。初期の導入は東部のハミ・バリコン地区からであるが、その後の安定的な受容は西部のジュンガル盆地西北縁が中心である。初期の導入に関して、複数の系統を想定できる。現在は土器の検討、鉄器の分析の途中であるため、継続して検討を進める必要がある。周辺地域との関係、特に北方、西方についての研究も今後の課題である。

中国新石器時代後期における地域間交流

— 山西省西南部の土器を中心に —

久保田 慎二

現在の中国新石器時代後期に関する研究の中心は、河南省が位置する地域に確認されている王湾三期文化にある。王湾三期文化は、